

自由論題2、報告1

報告テーマ

中華人民共和国建国初期における中国人民解放軍の民兵制度の形成：貴州省東北部を考察の中心に

“The Institutional Formation of People’s Liberation Army’s Militia in the Early Years of People’s Republic of China: Focusing on Northeastern Guizhou Province”

氏名(所属)

高 暁彦(東北大学・院)
GAO Xiaoyan (Tohoku University)

要旨(800字程度)

1949年10月1日、中華人民共和国の成立が宣言された。しかし、当時の西南地域では、新政権に反対する武装勢力がなお多く存在しており、内戦がまだ続いていた。戦争が続く中で進められた共産党政権の統治の確立は、基層レベルでどのような様相を呈していたのか。それが、本研究の主要の問題関心である。本報告では、特に中華人民共和国において整備された民兵制度の形成過程について分析する。

19世紀半ば以降の中国では、匪賊の蔓延という意味でも各種自衛団体の普及という意味でも社会の武装化が広範かつ高度に進んだ。高度に武装化した社会に対して共産党はどのようにして統治を浸透させたのか。報告者は、民兵制度がその問題を解き明かす鍵になると考えている。

中華人民共和国の民兵制度については、エリザベス・ペリー氏の上海民兵に関する研究が挙げられる。同氏の研究では、都市民兵の分析に重きを置き、農村地域の民兵については解放軍の影響があったという事実関係を確認することにとどまった(Perry, 2006)。それゆえに、本報告では建国初期の農村地域における民兵の実態に分析の焦点をあてる。具体的には、一次史料を用いて、民国期から一貫して匪賊と自衛組織といった在地武装の活動が活発だった貴州省の東北部に着目し、基層社会の視点から民兵制度の形成過程を考察する。資料としては、貴州省沿河土家族自治州档案局の所蔵史料を用いる。当該史料群には、当時貴州省東北部に派遣された解放軍部隊の報告書や、現地軍分区の命令、通達などが含まれている。

結論として、以下の2点を提示する予定である。①在地武装の多くは、「剿匪」を展開した解放軍に吸収され、民兵制度に組み込まれた。それは、解放軍のみでは、地域社会とのつながりの強い匪賊集団を完全に消滅することが不可能だったからである。②民兵制度の形成は、解放軍が社会の末端をも網羅した暴力行使の制度的手段を獲得したことを意味し、暴力行使の手段を国家が一元的に掌握するという国家形成の一過程として評価される。しかしながら、民兵の反乱や匪賊化といった事例が多数報告されていることから分かる通り、新しく成立した民兵制度は実に地域社会の伝統的な行動様式を多分に継承していたのである。